



Golden Loilem Group Business Inc. Myanmarshan Trading Co.,Ltd.

ミャンマー連邦共和国歴史の流れ

一般論では外国企業が相手国の過去を語ることは、余り歓迎されませんが、弊社はミャンマー企業として内政干渉に触れない範囲で記載致します。半世紀前の当時「ビルマ式社会主義」においても農業には深い歴史があり、“緑の革命”として政府号令のもとに付加価値の高い唐胡麻類は全土にわたり推奨されておりました。弊社は元来歴代政府に存在していた各種のプロジェクトを掘り起こし、最新情報の事業民主化に照らし合わせて健全な日本企業及び専門家の方々に理解を求め応援していただいております。それでは本題です。

11世紀にビルマ族が“パガン朝”という名で統一王国を建国します。14世紀にはシャン族がピンヤサガインという二つの王朝を建設、16世紀にタウングー朝を興して現在のタイ北部チェンマイから中央部のアユタヤ、さらにはラオスに至るまでに達する大国を築き、歴代の中でタイが外国の統治を受けたことは、その際のタウングー朝の2回だけとなります。その16世紀後期にコンバウン朝が興きて強固な中国（清）の乾隆帝が送り込んだ遠征軍をも見事にはね返します。その後19世紀に入りインドを制覇支配したイギリス軍が東方ビルマ進出を狙い、ビルマ中央部にまで全面戦争が勃発、三度における長期戦に力尽きビルマはイギリス領インド帝国になってしまいます。植民地となったアジア最大規模のビルマ農作地であるイラワジ・デルタ開発がインド人中心に開拓されて、ビルマ当地ではビルマ族を含む135の少数民族を集合させた多民族国家であった為に共通言語を奪われてカレン族、カヤー族、シャン族、カチン族などを“民族保護政策”の大義名分を利用することにより分離させられイギリスに対抗出来ないようにしました。

また当時中国に脱出していたアウン・サン氏（後に「ビルマ建国の父」となる将軍）ら2名を日本軍ビルマ偵察隊鈴木啓司陸軍大佐が帰国時に日本へ同行の上、日本軍本部を説得してビルマ独立派支援の決定に至りました。即応するに「南機関」という秘密工作機関を創設して中国海南島での訓練を開始、その時集められた独立運動家の精鋭30人は後に英雄「三十志士」と呼ばれるようになります。そのままタイ・バンコクでその特殊機関は「ビルマ独立義勇軍(BIA)」

を結成することとなり日本軍と共に英領ビルマに怒濤の快進撃をくり返し、ついにビルマ解放を成し遂げたのです。相互目的を達成した日本軍とビルマ側では直接指揮と間接指揮の差異が生じて足場が固まりませんでした。1943年8月日本軍がビルマの独立を承認します。翌年1944年7月イギリス軍からの戦闘が始まり長期における攻撃にあわやビルマ奪回という直前に当時アウン・サン将軍の指揮により1945年3月“抗日一斉蜂起”の実行によってビルマは守られます。その後第2次世界大戦後にビルマは交渉の結果1948年1月にイギリスより正式に独立を承認されましたが、アウン・サン将軍はその前年に32歳で暗殺され、命と引き換えに独立を勝ち取りました。独立後のビルマ国は135の民族で議会を開き1956年に選挙が行われました。指導者のウー・ヌー氏の与党が分裂、離脱してシャン族、カチン族も同調、1962年のクーデターでネ・ウイン将軍が軍事政権を樹立、そのまま26年間ビルマを統治します。経済主要政策もやはり「ビルマ式社会主義」であり、農業分野を除くすべての産業を国有化して強引に推進する政策はすべての外資企業が撤退を余儀なくされて事実上の鎖国状態になります。

歴史の流れとして約50年後の現在でもミャンマー自国の発展を願う歴代政府の活動に例外はありませんでした。1997年ミャンマー連邦共和国として正式にASEANに加盟。その後一部の先進国とのボタンの掛け違いから経済制裁は直接的に一般民衆へそのまま跳ね返っています。2011年3月よりの新生ミャンマー連邦共和国として2014年度ASEAN議長国としてエントリーを果たしており、積極的に国際社会への本格的な復帰へと意欲を見せております。今後のミャンマー連邦共和国の未来を踏まえまして、「雨降って地固まる」私の大好きな日本の諺ですが、今や強固な土台となりました。歴史の流れをご理解の上で弊社といたしましては、ミャンマー自国の経済成長を心より願っております。

Myanmarshan Trading Co.,Ltd.

トウゴマ量産プロジェクト

代表 As Kyaw Soe Moe